

## 哲学で稼ぐ

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

私は、東京の或る大学と大学院で哲学を学んだ。博士課程終了までに15年かかった。そのあと大学で30年間哲学を教えた。退職後フランスへ行き、パリで六年半暮らした。

いま大いに悩んでいるところなのだ。このままフランスで暮らすか、それとも日本で骨を埋めるか、と。フランスで暮らしたいのはやまやまなのだが、退職金は使い果たしてしまっし、年金は現役時代の給料の6分の1だ。パリのアパート代だけで消えてしまう。

私は、大きな誤算をしてしまったのだ。教職についている間は教育と研究に専念しよう、退職後は本を書いて生計を立てようと、そう思っていたのが大間違いだった。世間はそんなに甘くはなかった。

退職時に上下2巻の大きな本を出版した。これは、私が教職時代の30年をかけて書き上げたものだった。判りやすく面白い本にすることを目指したので、多少は読者にアピールするのではないかと思っていた。

ところが、これがほとんど売れなかったのだ。出版社からは、原稿料の代わりにその本を100冊もらった。いくら現物をたくさんもらっても、これではただ人に贈呈するほかはないので、1銭にもならなかった。

実は、出版を引き受けてくれる会社を探すのもたいへんだったのだ。「原稿の量が多すぎますよ。こんなの出したら、値段は高くなるし、2巻や3巻では収まらないし、うちは赤字ですよ」というのが一般的な反応だった。

或る親しい編集者はこう言った。「先生、30代の頃に名前を売っておくんでしたね。少しでも知名度があれば、話は違ってくるんですけど」

或る出版社の社長は、「お墨付きがあるといいんだけどなあ」と言って、「誰か知ってませんか？ 有名人でネ、パアッと引き立ててくれるような人」と私に尋ねてくる始末だ。

そうか、名前や顔が知られていなければ、いくら良い本を書いたって売れない時代なんだ。その代わり、いったん知名度が上がってしまえば、インチキ哲学だろうが、何だろうがドンドン売れる。

テレビに引っ張り出されたり、講演会に呼ばれたりして、たいへん派手な活躍をしている「哲学者」も何人かはある。こういう人たちを見ると、今の時代、「哲学で稼ぐ」こともまんざら夢ではないようにも思えるのだ。

昔は、哲学の本を書いて生活の足しにしようなどと言ったら、アホ扱いされたものである。しかし、今はそうでもないらしい。哲学書、あるいは哲学書まがいの本がけっこう売れているらしいのだ。

それは、書く人間によって左右されるようで、真正の哲学者が書いたものよりも、「哲学者」として名前や顔を売ることに成功した人、あるいは、そうでなかったら、芸人やすポーツ選手など「シロウト」の書いたもののほうがモテるらしい。

一時、哲学ブームなどということがあって、何にでも「哲学」という題を付けることが流行った。こういう時代を通して、哲学のイメージが二極化してしまったように思う。みんなに好かれる哲学と、みんなに敬遠される哲学だ。

私を知っている出版取次業の社長は、「どんなに良い本でも、売れなければクズだ」と吐き捨てた。

みんなに敬遠され、買ってもらえないクズの哲学と、みんなに好かれ、ただ持っているだけでも嬉しくなる哲学で、有名な誰々さんが書いたと思うだけでも、内容の良さが響いてくるような哲学。今の時代は、この二つの哲学に分極してしまったのだ。

それでも、良かったと思えるのは、どんな形にせよ哲学好きがたくさんいるということが、これによって証明されたことだ。

「哲学ファンクラブ—哲学ファンになろう」などというブログを書き始めたのは、そういう哲学好きに、哲学の本当の面白さをわかってもらいたいと思ったからである。

「哲学とは何か」とか「私とは何だろう」などといったシカツメらしい定義ばかり最初から求めていたのでは、そのうち哲学に飽きてしまい、もうウンザリだと思い始めるのは目に見えている。

哲学者ヘーゲルも言ったように、泳ぎを覚えるためには、地上でいくら泳ぎとは何かということを考えていても始まらない。実際に水の中に飛び込んでみて初めて、泳ぎというものがどういふことなのか分かるのである。

哲学が人間にとっての哲学である以上、まず実際に生きてみることから始まるのである。生きることが第一番で、生きることに夢中になり、頑張ってるうちに、ふと頭に浮かんでくる疑問がある。

例えば、「俺はなぜ、いつもこんなにガツガツしてるんだ」などと思ったりする。金に、異性に、食べ物に、あるいは出世に、いつも取っつかれて生きている。ガツガツしてるのは良いことなのか悪いことなのか、カッコいいことなのか悪いことなのかと、こんな考えがふっと頭をかすめるのだ。

たいてい、そんなことはすぐに忘れてしまうのだが、ひょんなところでまた浮かんでくる。何度も頭に浮かんでくるとしたら、それは、君が実際に生きていることを通して見つけ出した、君自身の哲学の問いなのだ。

それで一度、ガツガツ稼ぐとはどういうことなのか、ガツガツ食るとはどういうことなのか、ガツガツ他人と競争するとはどういうことなのかなどと、君自身にとって最も関心のある問題を徹底的に考えてみることだ。

これだけでも、人生のあらゆる問題に入っていけるだろう。金を稼いだり儲けたりすることの意味、食るとはどういうことか、異性とは何か、生存競争の原因、自分と他者の違い、等々、数え

だせばキリのない問題が君を待っているのだ。

「だいたい、俺はどうしてガツガツなんて言葉を使ってんだろう」などと考え出せば、哲学の重要な一分野、意味論のうちに知らず知らずに入っていることになる。

「ガツガツ」とは、心には空虚感、体には空腹感があることを言うそう。なぜ自分のうちにそんな空っぽの感覚があるのだろうか。

この段階になって初めて、「哲学とは何か」とか「私とは何だろう」といった問題にも自然に入っていけるようになるし、興味も湧いてくるのである。

「哲学とは何か」という問いは、実は「人生とは何か」という問いに等しいのである。そして、この問いから、「生きがい」とか「幸福」といった、誰の人生にとっても大事なことが少しずつ見えてくる。このことについては、あとでもう一度述べることにしよう。

さて、私は、退職一年後にもう一冊本を書いた。これは、時代のトレンドにも合致した読みやすい本のはずで、売れないクズ哲学とはちょっと違うんだぞとばかりに、大いに張り切っていたのだが、残念ながらこれも駄目だった。

5年間で600冊の売上げだった。一か月に平均10冊である。出版社からはとうとう印税がもらえなかった。

しかし、それでも嬉しいなと思ったことは、読者からEメールをいくつかもらったことである。何冊も買ってくれた人がいた。娘にも、娘の友人にもプレゼントしたと書かれていた。

こういう読者が一人でもいるかぎり、私は本を書き続けたいと思った。それが生計を立てることにすぐには結びつかないとしても、まずは共感しあえる人間の輪があるということを確認したいというのが私の願望だった。

そこで、私は、パリで暮らしている間に書いた2冊の本を出版することにした。いずれも正面きった哲学書ではなくて、私の趣味や、私と妻の生活流儀を書いたもので、哲学はその背後に隠れている。

私は、これまで、野球と西部劇で育ってきた日本人だ。野球は、子供の頃から自分でもやってきたし、高校・大学・プロ・ノンプロ野球のいずれを問わず好きだった。今は特に、大リーグの日本人選手の活躍する野球に惹かれていて、パリにいても、インターネットを用いて、文字による実況中継をいつも読んでいる。

その日本人選手の中でも、言動にどこか哲学っぽさが感じられるイチローに焦点を当て、西部劇のガンマンシップと宮本武蔵の剣法の精神をバックにして描き出したものが最初の本だった。

次に出したのは、私と妻が、日本とフランスで出会ったさまざまな清潔感覚の違いや共通点を描き出した本で、トイレのことやパン屋の造り、握手やキスの習慣、ペットや寄生虫の話など、雑談風に書いてあるが、その背後では、日本の無接触の精神とヨーロッパの接触の精神との比較が成されている。

最初の野球の方は、オンライン書店ではかなりの評判で、例えばセブンアンドワイのイチロー本の売れ筋順では、半年ぐらいはベストテンに入っていた。清潔の方は、この本の新しい感覚がまだ理解されないのか、今のところ、あまり芳しい成績とは言えないようである。

ネット販売のほうがまあまあだとしても、一般書店での売れ行きが今ひとつで、日本に一時帰国したばかりの私は、いろんな書店の売れ行きランキングを見ては、失望と希望の間をさまよっていた。本が売れてほしいのも確かだが、それよりも何よりも多くの人に読んでほしいというのが、私の偽らざる気持ちだった。

読んでもらえない著者ほど孤独なものはない。

そんな或る日、まるで天啓でもあるかのように、私の前に現れたのが、「わらし仙人」という奇妙な名前だったのである。

理髪店のソファに坐って、何か面白そうな雑誌はないかと探しているうちに見つけ出したのが、青春出版社の『ビッグ・トゥモロー』だった。

初めて見るこの雑誌は、今の社会でいかに成功するかということテーマにした、若者向けの雑誌のようだった。読んでみると、なかなか元気づけられるところがあって、面白い記事も多いのだが、その中でばったり出会ったのが、この「わらし仙人」という名前だったのである。

番町書店店長わらし仙人と書かれていた。インターネットによる小冊子の販売で、いかに高収入を得ているかという記事だったが、そんなことよりも、「わらし仙人」という名前が妙に面白かったのである。

自分から仙人と名乗っているのは、いったいどんな人物なんだろう、と思った。仙人というのは、もともとは中国の神仙思想や道教から来ている名称だが、仏教でも、仏陀を仙人の中の仙人とする考え方がある。

要するに、世俗を超越して無欲の境地に達した人間を言い、金儲けを勧めたり、現世的な成功を教えたりする人物にはそぐわない名前なのだ。

「わらし」というのは、おそらく「わらしべ長者」から取っているのだろうと思った。日本の昔話に出てくる、一本のわらしべを元手に大金持ちになった人物のイメージである。

金を稼ぎたいという欲望と、そんなものはクダラナイという悟りとが一緒になったような名前で、何ともちぐはぐな感じがしたのだが、その後、この「わらし仙人」こと斉藤秀信氏の著作をいくつか読むうちに、その意味がだんだん判るようになってきた。

わらし仙人の著書に初めて出会ったのは、或る書店の書棚で、『小冊子で稼ぐ』という題の本を見た時だった。何とも即物的、何とも世俗的な題で、私としては、このような本を買ったことは今まで一度も無かったのだが、この時はいつもとは違っていた。

私は早速この『小冊子で稼ぐ』という本を購入した。私自身、自分の書いた本があまり売れないという、きわめて即物的、世俗的な悩みを抱えていたからである。この本に書かれたノウハウが、私の執筆活動にとって何か大きな知恵になるかも知れないと思いつつ、私はこの本を買って、読んでみた。

私の哲学は、もともと、小事から大事へ、大事から小事へということをもットーにし、日常の哲学から永遠の哲学へということを見視野に置いている。これは、私の本を出している出版社のキャッチフレーズでもあるのだ。

深遠な哲学の根底にはいつも俗物根性がある、これが哲学の出発点となる。私自身、根っからの俗物であって、様々な欲望に衝き動かされ、様々な雑事に心を奪われているが、これ無しには深遠で高尚な哲学もあり得ない、というのが私の持論だ。

「わらし仙人」という名は、まるでその両面を象徴しているようで面白いと思った。私は何冊か仙人の書を読み、多くのことを教えられた。小冊子で稼いで金持ちになる方法を教える一方で、仙人は、「金持ちになるのを諦める」こと、すべてを「積極的に諦める」こと、つまり「悟り」の道も教えているのだ。（『「売れる自分」の作り方』58頁）

この矛盾が何を意味するのかということについての私の考えは、また別の機会に論じることしよう。

とにかく、私は、わらし仙人に倣って、「哲学で稼ぐ」ことが可能かどうかを試してみようと思立ったのである。

これは何も私だけのためではない。哲学そのもののためであり、哲学的な思考を愛する人々、とりわけ若者たちのためでもある。

「哲学で稼ぐ」などと言うと、人聞きが悪いかも知れないが、そもそも「稼ぐ」とか「儲ける」ということは「必死に生きる」ことを意味するのである。わらし仙人の本を読むと、そのことがよく判る。

これ無しに、私たちは、どうやったら人間的で豊かな人生を手に入れることができるのだろう。必死に生きること、そしてその生きることを意味を考へること、これはまさしく哲学の道そのものなのだが、この道はただ坐っているだけでは決して手に入らない。

哲学は食えない学問だと言われてきた。パラドクサルな意味で、役に立たない学問だとも言われた。それが、いつの間にか本気でそう思われるようになってしまった。役に立たない学問、実用的でない学問、はっきり言えば、金にならない学問だということで、社会から無くしてしまおうという風潮さえ生み出したのである。

現に、文部科学省でさえ、もうだいぶ前から哲学という学科目を無くそうとして、いろいろと手を打ってきた。大学新設や改革にあたっては、哲学という名はやめろ、文化論とか人間学にしろなどという通達を出してきたのである。

今、哲学で食っていくためには、大学教授になるか、あるいは本を書いて稼ぐしかないのだが、その大学でも哲学教授のポストはどんどん減っているから、非常に厳しい状況になってきた。

そうかといって、哲学書売って生計を立てるには、先ほども言ったようにマスコミで顔になり、そのご威光を頼りに売るしかないから、これも非常に難しい道だ。

ギリシャ時代には、ソフィスト（詭弁論者）と呼ばれる連中がいて、彼らは哲学で稼ぐことを知っていた。しかし、彼らの多くは、本物の哲学で稼ぐことよりも、うまく立ち回るほうを選んでしまった。自分自身の神がかった権威をでっち上げ、そのご威光で、中味のないインチキ哲学を売りまくったのである。

本物の哲学はそれだけでも面白いのだが、それが稼いだり儲けたりする手段から外され、それを提供するだけでは食っていけないとなると、人々は哲学することなど止めてしまうだろう。何しろ、必死に生きることだけで精一杯なのだから。

生きることの意味まで考えている余裕はないということになる。人間は必死に生きることによって文化を創り出していくのだが、その文化の最先端にあるもの、文化の意味までは見る余裕がないということだ。

最先端にあるものには目をつむったままで、文化そのものが巨大化していくのを見るというのは何とも異常な話だが、私たちが置かれているのはまさにそういう状態だ。

自己意識のない文化、自覚のない文化だけが育っていく。この状態を打破するためには、「哲学で稼ぐ」ことを可能にする新しい社会意識が必要なのではないだろうか。

[2006/12/19 magmag]

kount さんのコメント [2007/02/06]

興味深く拝読しました。現在の大学での哲学が敬遠されつつあるとのこと初めて知りました。私のような者には、現代こそ哲学が必要な時代はないようにも思われますが……。

しかし、一般の人が読んでも理解できないような難解な哲学理論は確かに存在価値が減っているように思います。もっと、個人の在り方、国の在り方、人類の在り方、経済の在り方、宗教の在り方などをテーマにした、中学生が読んでもよく理解できようような哲学が今求められているような気がします。

そして、哲学は理論や言葉で終わるのではなく人の生き方、国の在り方、世界の在り方を変えていくダイナミックなものでなければこれからの時代の哲学の名に値しないような気がします、いかがでしょうか。

出来ましたら、貴兄の哲学の一部をブログでご紹介いただければ幸いです。

小野しまとより

貴重なご意見を有り難うございます。

私も難解な哲学理論には反対です。哲学の勉強を始めました頃、どの本を読んでも何が何やらさっぱり分からず、辟易としたものでした。しかし、面白いことを発見しました。哲学者本人の書いたものを読みますと、意外に分かり易いものが多いのです。デカルトやパスカルなど古典的なフランス哲学がそうです。

難解なことで有名なヘーゲルの哲学も、日本語訳や解説書で読むよりも、実物のほうがはるかに判りやすいことに気がつきました。結局、自分の書くべきものが分かっている書いたものは判りや

すく、自分自身が分かっていないものを書こうとすると、難しくなるのではないのでしょうか。難解な用語で誤魔化したり逃げたりするエセ哲学者も多いと思うのです。(もともと、日本では、難解な用語で書かないと認めてもらえないという傾向があります。)

「自分の言葉で哲学を語ろう」とすることは、その意味でも重要だと思います。ただ、今度は、分かりやすく書かれた哲学が本当に理解されるのかということが問題になります。事柄の難しさがあることは否定できません。やさしく書かれればかえって分かりにくくなってしまふ、真の意味が見落とされてしまうということもあると思います。

その点をどう解決して、万人に伝達可能な哲学を造り上げていくかということが、私たちの課題となるでしょう。いずれにしても、哲学を生ダイナミズムに結びつけるためには、誰の心にも入りやすい、日常的な言葉と論理で表現することが欠かせないと、私も思います。